庫と確信する。平成十三年三月国際日本文化センターより『宗田文庫目録』書籍篇、B五判総八一三頁が編集委員井波律子・栗山茂久・白幡洋三郎・早川聞多・光田和伸（委員長）・西川慈子諸氏により出版された。内容は山田慶兒先生の巻頭序の次に善本解題と題し、宗田文庫中『商人買物案内』川崎屋吉郎兵衛著、文政三年（一八二〇）をはじめ五十二冊の書籍表紙と内容の一部が、写真と共に書籍の内容を簡潔明瞭な書評をつけ紹介されている。解題には客員編集委員の遠藤正治・北川央・小曽戸洋・酒井シヅ・杉立義一諸氏がそれぞれの専門分野を発揮した執筆となっている。解題の中に筆者が特に関心を持ったのは点眼瓶の歴史に関連した酒井シヅ先生の解題、渋江虬鑑試・馬場貞由訳述『硝子製法集説』、眼科手術道具に関連したヤンコウエンブルグ（蘭）著、吉雄伯玄甫訳『和蘭内外要方』・刊本中に最も古い眼疾患名の記述を見る、小曽戸洋先生の解題、月湖著『類証弁異全九集』等である。

二〇〇一年正月明け早々図書館を訪れた際、机に向って黙々と宗田文庫の書籍に一冊づつ目を通しておられた遠藤正治先生がこの解題の為であったのだと、そして諸先生の宗田先生に対する思いと文庫への情熱が解題の中にこめられ、単なる蔵書目録の域を越えた書籍の一冊となっている。本目録の構成は、和書（和製本を含む）・洋書・中国書の各部に、書名索引・著者名索引を、ハングル文字による図書（朝鮮書・韓国書）は洋書の部に排列されており、和書は国立国会図書館分類表（NDLC）を使用。医史学の分野のみ細部に分類されている。記載項目の順序は書名・編著者名・出版事項・形態事項・注記事項・登録番号・諸求番号となっている。

なおこの書籍は非売品の為、多くの人々の目に触れ得ないのが真に残念である。

（奥沢　康正）

〔製作・中西印刷、京都市上京区下立売通小川東入西大路町、二〇〇一年三月二十一日、B五判、八一六頁、非売品〕

内藤記念くすり博物館編

『大同薬室文庫蔵書目録』

内藤記念くすり博物館の青木允夫氏から、同館に中野康章先生（以下敬称略）の旧蔵書約二万点約四万冊が入ったとうかがったのは三年ほど前のことだったろうか。とうてい信じられない思いだった。なぜなら、中野康章の蔵書は昭和二十九年十月三日に広田書林によって売立てられたことは知っていたし（『日本古書通信』昭和六十二年八月号、一八頁「戦後大口売立表」）、現にその蔵書印「大同薬室図書之記」が捺された古医書は矢数道明・大塚敬節先生や私の蔵書中にもあり、また今でも古書市場に出回り、完全に四散したとばかり思っていたからである。しかも小量ならともかく、四万冊も残っているなどとは。しかし、先年同館に足を運んで視察した真

柳誠氏の報告から、どうやら本当らしいことがわかり、以来、その目録の公刊を首を長くして待っていたのである。

この『大同薬室文庫蔵書目録』は内藤記念くすり博物館開館三十周年記念の出版物として、平成十三年三月に出版された。中野家から同館にトラック二台分の蔵書が搬入されたのは平成五年二月のこと。以来、七年をかけて目録作成作業が行なわれ、このたびの発刊をみたという。

中野康章の略伝は本書巻首の「中野康章先生の御紹介」（野尻佳与子氏執筆）に要領よくまとめられている。それによると、明治七年、秋田県の神職の家に出生。同二十四年、十七歳で東京に出て、浅田宗伯に入門。同二十七年の宗伯の没後、同三十一年には、その養嗣子浅田恭悦に随行して中国に渡り、各地を視察。一カ月後に帰国し、居を大阪に移し、大阪福島村中之天神社の社掌を勤める傍ら、漢方医療を行い、大正五年には医師免許を取得した。弟子に森田幸門がいる。書画に通じ、古亭あるいは布留廼舎主人と称し、室号を大同薬室と称した。昭和二十二年没。享年七十三歳。

私は平成十三年五月三十一日と翌六月一日の二日間、同館を訪れ、大同薬室文庫蔵書の数々を閲覧させていただいた。むろん二日間ではとうてい全書に目を通すことはできなかったが、私の専門とする分野で興味を覚えた書を例に挙げれば次のようなものがある。

中国古版本としては『玉機微義』『証治準繩』『鍥王氏秘伝図註八十一難経評林捷徑統宗』『同叔和図註釈義脈訣評林』『鍥太上天宝太素張神仙脈訣玄微綱領宗統』『注解傷寒論』（板坂卜斎・森立之旧蔵）『湯液本草』『医学発明』『活法機要』その他の明版がある。

朝鮮版としては『新刊補註釈文黄帝内経素問』『医学入門』『増修無冤録大全・同諺解』『済衆新編』、朝鮮写本としては『本草附方』などがある。

日本古鈔本としては『頓医抄』『続添鴻宝秘要抄』『撮病指南』『大徳済陰方』『鑑効方抜書』などがある。

稀覯の和刻本としては柳田活斎の『傷寒論繹解』が目についた。

近世写本の珍本としては北尾春甫の『春甫医談』『治療工夫』、北山友松子の『腹診秘訣』、古矢知白の『傷寒論天地人身窮理内外表裏之定於四位図』同『傷寒論国字解』、森立之の『千魚一観録』など多くは天壌間無二の孤本だろう。

名家自筆稿本、ないしは名家筆写本としては喜多村直寛の『難経集説』同『学晦堂筆記』、森立之の『読古方薬議』、今村了庵の『了庵文稿』等、清川玄道（菖軒）の『難経輯釈備考』、渋江抽斎写の『時還読我書』、青山道醇写の『霊枢議義』、森約之写の『青嚢秘録』などがある。浅田宗伯の手沢本も多い。

大同薬室文庫はまさに近来稀にみる古医書コレクションの出現である。おそらく二十世紀では最大の漢方蔵書量であろう。未整理品が数千点あるといい、さらに今後、大同薬室の書画骨董器物類が大量に収蔵される予定だという。何が出るか興味津々である。

ともあれ、これら大同薬室旧蔵の厖大な蔵書の価値を認識し、労苦をいとわずこつこつと蔵書目録を作り上げられた内藤記念くすり博物館のスタッフ一同には、心からの敬意を表さずにはいられない。

（小曽戸　洋）

〔内藤記念くすり博物館、岐阜県羽島郡川島町竹早町一、電話〇五八―六八九―二一〇一、二〇〇一年三月二十二日、A四判、五一〇頁、一〇〇〇〇円（送料込）〕

神戸十四郎　編

『宮崎県医史懇話会二十二年の歩み』

宮崎県医師会では、昭和四十九年三月の定時代議員会に〝宮崎県医史編纂〟の議が提案され承認されたが、その後、出版経費等について曲折があった。そして同五十三年三月に出版の目途がたった。

編纂の過程の中で、当時の医師会長内田醇先生と、副会長の田代逸郎先生が大変な努力を重ね、出版の暁には日本医史学会総会を宮崎市に誘致しようと運動され、第七十九回の総会を同五十三年三月二十五日、二十六日の両日、宮崎市での開催に成功された。

因に『宮崎県医史』は、B四判で上巻が一一九六頁、下巻が一二八九頁で総計二四八五頁の大著作であり、編纂の中心、内田、田代両先生の他に一九名の先生方が編纂作業に参加された（発刊は五十三年三月二十四日）。

宮崎市での第七十九回総会は、内田先生が総会会長として、「宮崎県の医史学散歩」と題する会長講演を、田代先生が「宮崎県の明治に於ける公立病院」と題して特別講演をされ、また玉丸勇先生が「真木和泉と西郷南洲―その医学との関係」について特別講演された。

この総会開催の大成功を記念して、『宮崎県医史』編纂委員の方々を中心に〝宮崎県医史懇話会〟が結成され、医史学の火を消すことなく県下の医師会員に広く医史を知ってもらおうと昭和五十四年四月十四日に設立された。

このような経過をもって設立された〝宮崎県医史懇話会〟の行事は、総会と幹事会を除くと、①総会日に研究発表を行う。同時にその年に行う医史跡探訪地の計画と紹介を行う。②医史跡探訪会を毎年開催し、探訪地の医師や史家と交流する。その地区の郷土料理店で食事をする。参加者の夫人同伴を歓迎する。③県下の記念すべき日に、植樹や碑建立を行う。④県医師会創立一〇〇年誌の刊行に協力する等があげられた。

ところで、この懇話会でこの二十二年間に訪れた史跡地を連記してみよう。

初年度が延岡、次いで飫肥、都城、児湯、日向市、佐土原・西米良、小林・西諸県、高千穂夜神楽、宮崎市、鹿児島市（この年はじめて県外に出る）、日南市、竹田市、中津市、日田市、